西洋近現代史研究会報告要旨シリーズ第 2 号
2018 年 8 月

# フランス第三共和政初期（1870-1889）におけるボナパルティズムの展開
## ―ポール・ド・カサニャックを中心に―

湯浅　翔馬

## はじめに

フランス第三共和政（1870-1940）初期のボナパルト派研究の多くは、「名望家」に立脚した党派構造や、王党派らとの連携を通じた「保守化」を指摘してきた。こうした「保守化」は、「権威」とともにボナパルティズムの原理の両翼をなす「デモクラシー」を放棄したものとされ、ボナパルト派の勢力の低下を招いたと批判的に解釈されてきた。本報告で扱うポール・ド・カサニャック Paul de Cassagnac（1842-1904）は、当該時期におけるボナパルト派右派を代表する政治家・ジャーナリストであり、王党派との協力を積極的に訴え続けた点で、政治勢力としてのボナパルティズムの「保守化」の先頭に立った人物である。本報告は、カサニャックの言説とその展開を通じて、ボナパルティズムの「保守化」を再検討するものである。

## 1. 第二帝政（1852-1870）とポール・ド・カサニャック

ポール・ド・カサニャックは、父グラニエ・ド・カサニャックと母ローザ・ボーヴァロンの長男として生まれた。父グラニエは、第二帝政期の著名なボナパルト派右派の政治家であり、ジェール県選出の立法議会議員を長く勤め、同地に強固な地盤を作り上げた。

1850 年代末から 60 年代初頭にかけてフランス南西部で法学を学んだポール・ド・カサニャック（以下カサニャック）は、1862 年にパリに移り、次第にジャーナリズムの世界に惹かれていった。1866 年、カサニャックは父が主幹を務めていたボナパルト派右派の日刊紙『ペイ』*Le Pays* に参加し、その攻撃的な文体で、パリのジャーナリズム界で強固なボナパルト派右派として知られるようになっていく。

カサニャックがジャーナリストとして活動を始めた 1860 年代後半は、第二帝政が自由化へと向かっていた時期にあたる。成立当初、権威的な構造を有していた帝政は、「第三の党」と呼ばれる体制内共和派とともに、政治的・社会的自由の拡大を推し進めた。出版の自由や議会の権限が拡大され、反体制派の活動も活発になっていった。こうした自由化は、1870 年の憲法改正により、その頂点を迎える。いわゆる「自由帝政」の時期である。

こうした帝政の自由化に対するカサニャックは批判は苛烈である。自由化を、「共和派」や「急進派」といった一部の大都市の住民に対する譲歩と捉え、「真の人民」たる農村部の住人への回帰を訴えた。カサニャックは、自由化や議会主義への傾倒を「行動する皇帝」の権威の弱体化としている。彼にとって、1852 年体制という国民投票によって承認された権威的体制こそが、あるべき帝政の姿、あるべきフランスの政治体制だった。第三共和政初頭、カサニャックは帝政（＝1852 年体制）の再建を求める活動を行っていく。

## 2. 1870 年代の共和政とポール・ド・カサニャック

1870 年 9 月 2 日、スダンの戦いでナポレオン 3 世がプロイセン軍の捕虜となった。その 2 日後、パリの民衆に引き連れられた共和派は、共和政樹立と臨時国防政府の設置を宣言し、第二帝政はあっけなく瓦解した。ガンベッタらが熱心に戦争の継続を訴える一方で、休戦条約批准のために 1871 年に召集された議会では和平を求めた王党派が多数を占めた。この議会から、穏健共和派となったティエールが大統領職に選出され、多額の賠償金の支払いとアルザス＝ロレーヌの割譲という禍根を残しつつ、ドイツとの終戦を果たした。1873 年、ボナパルト派と正統王朝派の結託により、ティエールが失脚した後、大統領職に王党派マクマオンが、首相にはオルレアン派ブロイ公が就任し、「道徳秩序」と呼ばれる保守派体制のもと、王政復古が目前にまで迫った。結局、王政復古は失敗し、1875 年にはオルレアン派と穏健共和派の「妥協」による「第三共和政憲法」が制定され、1876 年の下院選で共和派が勝利を収めた。1877 年にはマクマオンが、王党派が多数を占める上院の支持のもと、下院解散を強行するなど、1870 年代は、王党派を中心とする保守派右翼勢力と共和派間で、激しい権力争いが展開された時期と言える。

こうした状況下で、カサニャックは、共和政と共和派に対する激しい批判を展開する一方で、王党派とボナパルト派の同盟による反共和派戦線を訴えた。カサニャックは自身を反共和政の保守派としている。しかし、1873 年に王政復古が目前に迫った際には、王政はすでにその歴史的役割を終えており、その復古はもはや時代遅れであるとして反対を唱えた。カサニャックによると、世襲制を象徴する王政は過度に不変である一方、選挙制を象徴する共和政は過度に可変であり、両者は近代フランスに根付くことなく崩壊した。これら相反する二つの原理を統合することが帝政の役割だったと分析している。普通選挙制が有する危険性と同時に、時代の不可逆性を認識していたカサニャックは、不安定なデモクラシーの時代を導くことが、帝政の役割であると訴えている。この役割を担うのに最も適

した体制が、1852 年体制であり、フランスが採用すべき政体とされたのである。

この 1852 年体制の希求から、1870 年代にカサニャックは「帝政主義」という論理を展開する。これは、帝政をボナパルト家から独立させ、ボナパルト家の正統な継承者以外の人物による帝政（＝1852 年体制）の再建をも支持しうるとするものである。この主張の背景には、万が一、皇太子が死去した場合、ナポレオン 3 世の従兄弟で、共和派として活動していたナポレオン公に継承権が移り、帝政再建が遠のくことへの危機感があった。カサニャックの懸念は、共和派が政治的な実権を掌握する 1879 年に現実のものとなる。

## 3. 1880 年代の共和政とポール・ド・カサニャック

1877 年の下院選で勝利した共和派は、1879 年、上院でも多数派を形成するに至った。これによりマクマオンは大統領職を辞任し、穏健共和派グレヴィが大統領に選出された。こうして、共和政の成立から約 10 年の歳月をかけて、下院、上院、大統領の三権力を共和派は掌握したのである。さらに、1881 年の下院選では、保守派約 90 議席に対し、共和派は約 400 議席を獲得する「大勝」を納め、オポルチュニトと呼ばれた穏健共和派と共和派左派を中心に、共和政の確立が図られていく。

一方、王朝に立脚する保守派勢力は衰退の一途をたどる。特にボナパルト派は厳しい状況に置かれた。1879 年 6 月、亡命先のイギリス軍の一員としてズールー戦争に参加していた皇太子が南アフリカで死去した。皇太子はナポレオン 3 世の唯一の息子であり、その死は直系の断絶を意味した。共和派として活動していたナポレオン公ジェロームに皇位継承権が移る一方で、皇太子は、従軍前に書いた遺言において、ナポレオン公ではなく、その長男のヴィクトル公を自身の継承者として指名していた。ボナパルト派の指導者層は、第二帝政憲法に基づいたナポレオン公の継承を正統なものとしたが、カサニャックら一部のボナパルティストは、前述の「帝政主義」の旗印のもと、反ナポレオン公を掲げ、ヴィクトル公のもとでの帝政再建を訴え始めた。1880 年代のボナパルト派は、ナポレオン公のもとで共和政内での改革を求めるジェローム派と、ヴィクトル公のもとで帝政再建を求めるヴィクトル派に分裂した状態に陥ることになる。

カサニャックは、ヴィクトル派の指導者の一人として、ナポレオン公に対する批判と彼が認めた共和政に対抗するプロパガンダを展開した。特に、共和派政府による反修道会政策に対抗するかたちで、信仰の自由の保護を掲げる言説を繰り広げた。ヴィクトル派内の左派勢力の中心人物であるジュール・アミーグが 1883 年春に死去した後、ヴィクトル派の

運動の主導権を手にしたカサニャックは、王党派との協力路線を支持し、王党派との融合という意味でのボナパルト派の「保守化」が展開していった。

こうした中、1884 年、ヴィクトル公の無気力と衰退していく保守派の現状から、カサニャックは「ソリューショニスム」なる論理を発表し、王政復古も支持しうると主張した。デモクラシーの時代においては王政も帝政的な統治を行うことを余儀なくされるだろうとしたうえで、信仰を破壊する共和政を打倒し、君主政を再建するならば、「オルレアン家でもボナパルト家でも構わない」としたのである。こうして、カサニャックは、「帝政主義」で展開していた帝政再建という目的を捨て、帝政派と王党派のより密な連携を求めていく。

この論理のもと、カサニャックがその一角を担った、ボナパルト派、王党派、カトリック勢力の政治組織、保守派同盟 Union des droites は 1885 年の下院選で、一定の成功を収めた。保守派間の密な選挙協力のもと、第 1 回投票では保守派勢力の 176 議席に対し、共和派勢力は 127 議席であった。第 2 回投票では、急進派と穏健共和派の選挙協力により共和派が多数派を確保したが、保守派の獲得票数は全体の 42%、201 議席に達している。

急進派、穏健共和派、保守派が議会を三分する状況下で、保守派同盟が一定の影響力を議会内で行使できるようになった中、ブーランジェの陸軍大臣登用に象徴される急進派の伸張と、それによる反カトリック政策の急進化への懸念から、保守派同盟は、1886 年から 1887 年に穏健共和派との妥協路線を模索している。カサニャックはこれに熱心に与した。彼は、保守派同盟は、王朝の利害よりも、キリスト者と愛国者の利害に基づいて形成されたものであるとして、信仰の自由の保護を条件としたルーヴィエ穏健共和派内閣と保守派の妥協を支持している。このように、1880 年代後半には、ボナパルティストとしてのカサニャックの姿は薄れ、「祖国とキリスト教を愛する保守派」として、どのような態度を取るべきかが問題の中心となっていたのである。

このような点はブーランジスムへのカサニャックの対応にも見て取れる。当初、急進派を中心とする改憲運動だったブーランジスムは、保守派をも取り込み、議会共和政に不満を持つ勢力が一堂に会する運動になっていった。1889 年、カサニャックは、政治的自由よりも信仰の自由を重視する自身の保守派としての立場を述べた上で、「ブーランジェ的共和政」は、帝政や王政のように、信仰の自由を回復するものになるだろうと主張している。

## おわりに

ポール・ド・カサニャックの言説の変遷からは、共和政の成立と確立に向かい合った、

ボナパルト派右派の一例を色濃く見て取ることができる。1870 年代というまだ体制が確定していない時期において、カサニャックは、王党派との反共和派戦線を支持しつつも、王政復古に断固反対している。この時期のカサニャックのボナパルティストとしての姿勢は、「帝政主義」の思想とヴィクトル公支持の姿勢に現れている。しかし、1880 年代の保守派の衰退と共和派の伸長、そしてカトリックに対する追及を前に、彼は「ソリューショニスム」という論理のもと、帝政支持者の思想という意味でのボナパルティズムから離れ、王党派へと歩み寄った。さらに、1880 年代後半には、信仰の自由を保護する「共和政」との妥協を訴えるに至る。カサニャックを例に取れば、ボナパルティズムの「保守化」は、1880 年代後半には、「保守的共和政」あるいは「ブーランジェ的共和政」の容認という方向性を含むものとなったのである。このように、カサニャックの言説の展開を通じて見た、政治勢力としてのボナパルティズムの「保守化」は、単に「デモクラシー」を放棄したものとは言い切れない。共和政の確立が進む一方で、王朝を土台とする保守派右翼が衰退していく政治状況を前にして、いかにして共和派と対抗するか、さらには、何を守るべきなのかが問題となる中で、ボナパルト派に残された数少ない選択肢はどのようなものだったかを検討したうえで、彼らの思想と運動を位置づけ直すことが必要であるように思われる。

主要参考文献

史料

Archives de la Préfecture de Police, Paris, BA 997-1000, dossiers Paul de Cassagnac, 1869-1896.

Paul de Cassagnac, *Empire et royauté*, Paris, Lachaud et Burdin, 1873.

Id., *Œuvres. Pour le Dieu, pour la France*, Paris, L'Autorité, 1905, 8 vol.

研究文献

Patrick André, *Les parlementaires bonapartistes de la Troisième République(1871-1940)*, thèse de doctorat, (Université Paris IV), 1995.

Karen M Offen, *Paul de Cassagnac and the authoritarian tradition in nineteenth-century France*, New York, Gardland Publishing, 1991.

John Rothney, *Bonapartism after Sedan*, New York, Cornell University Press, 1969.

（2018 年 7 月 28 日受理、2018 年 8 月 1 日公開）